

St. Luke's International University Repository

Report of panel discussion

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 夏実, 村本, 淳子, Morita, Natsumi, Muramoto, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014835

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



元気が出る実践と教育を問う

森 田 夏 実¹⁾、村 本 淳 子²⁾

第3回聖路加看護学会学術大会は「実践の質を高める看護教育を求めて」をメインテーマに開催され、シンポジウムのテーマは、「元気が出る実践と教育を問う」となった。学術大会のテーマやシンポジウムのテーマを決める作業は大変わくわくするもので、企画委員全員が英知を出し合って議論し、一人では生み出せないアイデアとして結集されていく。それだけに時間がかかる。今回のテーマもそうして生み出された名言と自負している。

テーマ決定までの経緯は、藤枝会長の主題である「看護教育」を主軸とし、本学会の中心的理念である「実践」との関係を多方面から考えていき、現在の看護実践をもっとパワーのあるものとして、生き生きと楽しめるナースになれないものかという方向に集約されていった。

「元気が出る」というキーワードは『元気の出るインフォームドコンセント』や「元気のでるテレビ」などから連想された。「元気」には「空元気」、「無理な元気」、「元気を出させる」という、表面的、受け身的な意味合いもある。しかしここでは、本当に元気がある状態とは何かを考えてみようということになった。本当の元気とは何か？ 話し合いは様々な方向に広がったが、結論としては「その人らしく」、「気持ちよく仕事ができる」、「health」の意味合いを持っているという合意に至った。

- ・人が「その人らしく気持ちよく仕事ができる」ということは、いったいどのようなことなのだろうか？
- ・「その人らしく仕事ができる」ことによって、なにが、どのように変化していくのだろうか？
- ・元気がでる実践と教育にするためにはどのようにしたらいいか？

「元気が出る」というキーワードを採用してみたものの、企画委員の中でもこの表現が今ひとつしっくりせず、少し解説を加える意味からサブテーマをつけてはどうかという意見が出された。がむしろ、「元気の出る」についての解釈や答えはシンポジウムで求めようということになった。

もうひとつこだわったのは、「元気が出る実践と教育」のとについてである。並列に表記すると「育てる」を主眼にしているメインテーマの意味が薄れるといい、「元気の出る実践を支える教育」とか「元気の出る実践を創造する教育」など、実践と教育の関係性（リンク）

実践の質を高める看護教育を求めて（メインテーマ）

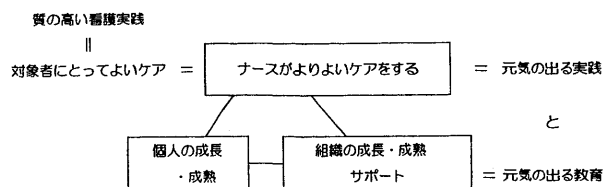


図1 元気が出る実践と教育の関連

の意味合いを強調したいという意見が出された。しかしあえて、並列させることで、それらも含めて広くディスカッションが展開されることを期待した。

このような経緯を通して、シンポジウムで期待される論点は図1のように整理された。

まず、メインテーマである「実践の質を高める看護教育を求めて」で意味される「質の高い看護実践」とは、すなわち「対象者にとってよいケア」のことである。それは「ナースがよりよいケアをすること」と言い換えられる。ナースがよりよいケアを行うには、ナースが「個人として成長・成熟することと同時に、ナースの成長を支える「組織のサポート」が必要であり、そこには「組織の成熟」も必要である。すなわち、個人の成長、組織の成長を視野に入れ、それぞれの立場で具体的な理念、考え方、方策を持っている必要がある。

この考えに基づき、基礎教育、院内教育、CNS、教育を受ける者、行政という特徴ある立場が設定された。それぞれの立場については図2のように関連づけられた。

基礎教育の立場としては菱沼典子さん（聖路加看護大学）で、ナースとしての基礎教育をする立場と、教育環境を司る基礎教育全体の立場も併せた位置づけである。

CNSの立場は深沢裕子さん（長谷川病院）である。ここでCNSの立場とは、まず基礎教育を受け、社会に出ることで自らの成長の必要性を感じて大学院で再学習し、CNSの立場で臨床現場で自らを教育して研鑽を積みながら、同時に他のナースを育て、教育も遂行するという立場として位置づけて、その特徴は自己教育であると捉えている。

院内教育の立場は中村幸子さん（前虎の門病院看護教育部）で、個を育む教育的環境に関する理念を踏まえて、組織としての個人のサポートに焦点を当てている。

先水孝さん（東京女子医科大学病院中央病棟集中治療

1) 国際医療福祉大学 聖路加看護大学博士後期課程

2) 三重県立看護大学

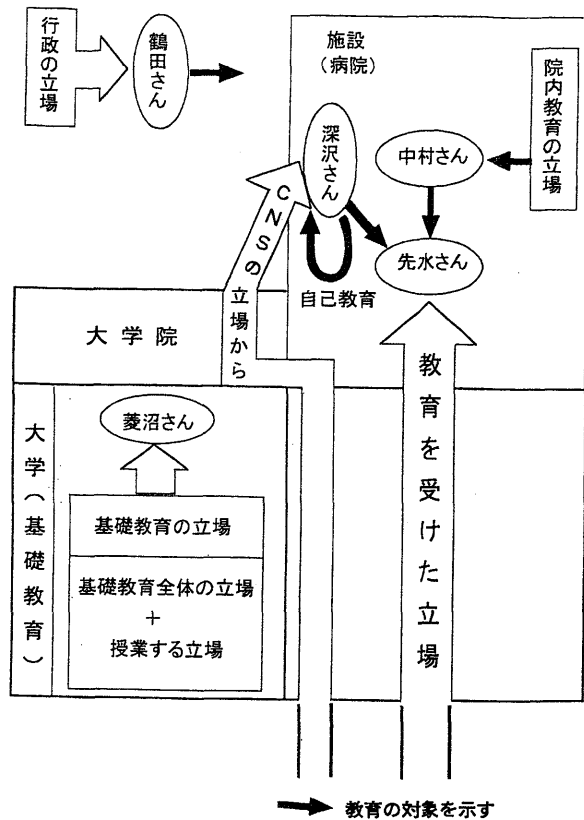


図2 シンポジウム「元気が出る実践と教育を問う」
シンポジストの立場の関連

部)には、基礎教育および院内での教育を受けている立場から、現在進行形で教育を受けている生の声として発言を依頼した。

鶴田恵子さん(横浜市衛生局:当時)は、看護提供施設(病院等)を掌握して統括している行政の立場からの発言を期待した。

このように各シンポジストの立場の関連を整理して、それぞれの立場の特性を明確にしながら、シンポジウムのテーマである「元気が出る実践と教育を問う」に迫っていった。

【シンポジストの発言】

●菱沼典子さん

教師は学習者のやる気を引き出す役割があり、これは看護が患者の生命力を引き出す役割と共通しているという理念を示し、学習者には教師が教えている内容を自分自身で楽しく思っているかどうか伝わり、教師の楽しんでいるテーマに学習者を巻き込んでいくことで、両者がともに元気になっていく、と主張した。そして、教師が自ら取り組んでいる(教えている)テーマを楽しんでいる、自分の考え方のモデルを示す面白味を感じ、同時に未知数を実感する。学生をその追究の仲間と思い、学生にも看護を極めてほしい、そして教師を乗り越

えてほしいと真に願っている。このようなメッセージを学生に力強く伝えていけること、これこそが元気の出る教育の証であると、締めくくられた。

心の中に大きな情熱を潜ませながらさわやかに聴衆に語られると、真の元気に触れる気がした。しかし、現実を目をすれば教育に時間がかかりすぎて、本来、大学教員は元気をもって、職場がおもしろい、研究がおもしろいと思っていたが、自らのテーマを面白がる時間が少ないのが残念である。理想のみを追求せず、足元をしっかり見ていくことも元気への第一歩であると思わされた発表であった。

●深沢裕子さん

CNSは、直接ケア、スタッフ指導、コンサルテーション、研究などがあり、疾患の理解やセルフケアに向けて、知識や思考プロセスを提供し、実践モデルとなるという役割がある。このように様々なCNSへの重い期待を背負いながら経験した事例を引きながら自身の元気の素について語られた。そして、「他者関係および、自分の内なる声への敏感さ」、そしてその中から「自分の弱さを見つめることができた時に何かやれるという元気の素をつかんだ」と発言された。

言い換えれば、自分の未熟さにどん底まで落ち込んだ時に、今後の課題への一筋の光を見ることができたということであろう。葛藤を前向きに変えていくことが元気の素だと、自身の内なる声を聴いているかのように静々と語られ、精神看護を専門とされているナースを実感させる発表であった。

●中村幸子さん

虎の門病院は看護教育部にナースが専属に配置され、教育プログラムが体系化されており、教育システムの運用(ハード)のみならず、そこで教育に携わる個々のナース(ソフト)が丁寧に活動しているというのが特徴である。院内教育のシステムを紹介し、院内教育に関わった事例を用いて元気の出る教育と実践について発表された。

はじめの事例は、就職2年目の課題に取り組むことで、ナースとしてぶつかった壁をスタッフナースが指導ナース(中村さん)と共に乗り越える経験ができた事例であった。5時間にわたる苦悩の末、「ジョハリの窓」のようにお互いに理解できる窓が広がったという実感を得られ、双方ともに元気になったと話された。2事例目は、プライマリーナースのトレーニングコースで、学習者(ナース)が概念の理解のみならず、自らの看護を実感できるようなプログラムを組み、さらに病棟のチーフナースと連携して、患者の反応や看護の効果をナースに実感出来るように指導の重点を置いたことがよい効果につながった例であった。3つ目は、事例検討会に課題をもって臨んでいたベテランナースが、事例検討を通して本音で自分の看護について話せるようになって成長したという事

例であった。

以上の経験から、元気の出る実践と教育の要素として、「課題達成の自覚・認識」、「看護の実践の中で満足する」、「自分の変化の実感」などをあげ、これらはすべて「人的資源」があって初めて明確になることを示された。具体的には、「自分には見えない点を指摘してくれる人」、「さらに成長できるように信じて見守ってくれる人」、「目的達成を評価してくれる人」の存在が、元気の出る実践を支えていると締めくくった。そして、中村さん自身も他の人に支えられながら今まで経験を重ねることができたと述べられた。

実践と、そして実践に関わる教育に携わった経験すべてが、自分への元気づけとなり、現在「看護教育」を専攻する大学院生となって学習中であり、まさに、元気のまっただ中といった感じであった。

●先水 孝さん

他分野で学習され、さらに看護を学び、現在ICUで看護師として働いていらっしゃる。社会人2年目というフレッシュな感覚で「元気の出る実践と教育」のシンポジウムに望んでおられた。

心に残る発言として、「基礎教育のどれがどのように現場の仕事に繋がったかということは明言できない。別のものとしてとらえているし、必ずしも対応させようとしていない」と述べられた。そして、ナースを育てるのは、やはり現任教育が一番重要であると主張。自分が教育されている組織の土壌を分析してみると、スタッフナースの教育は、管理者としての上司の考え方やマネジメント能力、共感能力にかかってくることを強調された。

先水さんの発言や討議を聴きながら、これまで受けてきた看護教育について、自分への影響について語るのには一定の時間が必要であるという印象をもった。まっただ中にある場合はなかなか見えないものであるが、あるまとまった期間が過ぎた後で、自分の経験、受けてきた教育の意味、今後の課題などが、より明確になっていくものであらうと感じさせられた。

●鶴田恵子さん

「元気が出る…」のシンポジウムに出ることを娘さんに話したら、「家庭人としては元気のない母親なのにね」と言われたと語り始めた。しかし、鶴田さん自身は「職場で仕事をやり遂げる時に最も元気が出ます」と明言された。ナースが仕事をしている病院を管轄するという立場から、それぞれの病院でナースが「仕事をやり遂げた」という体験を得るためには、第1にキャリア開発が重要である。行政は組織としての病院のニーズと個人のニーズとの調和をはかりながら、すなわち、個人のライフサイクルと主体性をも絡めながら、様々な意思決定に関わる役割を持つという。看護は複雑な構造をもつが故に、個人の努力だけではケアの質は向上していかないという

特性を持つ、人的サービスであり、個人のキャリア開発を支える責任は組織にあると述べられた。

教育への期待として、基礎教育では、自己を統合できる専門職の基礎をじっくりと養ってほしいと希望された。具体的には「仕事」から逃げない、組織の見える人を育ててほしいとのことであった。またこれからは、起業家スピリットをもった、病院内（企業内）ベンチャーへチャレンジできるナースの教育が急務であると、今後の課題を熱く語られた。

【会場との質疑応答】

会場はシンポジストの一人一人の発言がそれぞれ核心をつくものであり、聴衆はその内容や雰囲気をかみしめて味わう時間がしばし必要であった。

会場からおよび座長から、基礎教育と現場教育の関連、教育の質や内容の違いなどに関する質疑応答があり、また参加者の経験が会場内で共有された。

基礎教育と現場教育では、学び方が異なり、基礎を現場で生かすという強いつながりを考え過ぎなくてもよいのではないかという意見が出された。すなわち、基礎教育は学び方を習得するところであり、また困った体験をしたときにどのように乗り越えるかを知るところに力点が置かれている。それに比して現場教育は基礎教育を踏まえるはするが、職業人としてまた新たな出発と考える方がよいのではないか。基礎教育（大学）で学んだことを社会で生かすという発想に、ナースはこだわりすぎているのではないかという意見が追加された。考えてみれば、一般企業では、大学で学習したことをそのまま生かすというより、その会社の企業人として再教育していくのが常であることから、この発言はとても心強い思いがした。

しかし、現場で働く方からは、看護はとても複雑な状況で展開されるから、基礎教育でもこの複雑性を把握していける力を育ててほしいという強い要望も出された。

もちろん基礎教育と現場教育とは、教育の仕方や内容は異なるが、また、教育を受けるものとして学ぶ姿勢や学び方にも違いがあるのではないか。学校では知識を習得することだけでなく、よい教師に巡り会うことも大きな目的であるのに対し、現場では、実践を通してナースが自信をもち、やる気をもち、責任感を育てていくなどの専門職としての教育を強化しているという主張もあった。

学生時代の体験として、教師が学生（学習者）を大切に扱い、学生の主体性を尊重してもらったこと、また看護について十分考える機会が与えられ、看護のすばらしさを感じさせてもらったという会場からの発言に、教育の根本を再認識させられた。

またパワーあふれる鶴田さんに、「その元気の素は？」との質問があったが、即座に「落ち込み」という答えが返ってきた。自らの落ち込みをバネにする力こそ、元気

への源泉ということ、体験を交えてユーモアたっぷりに話され、大変印象深かった。

そして、最後に菱沼さんに「看護をどのように考えるか？」と最も基本的な質問があり、「相手の生きる力＝やる気を引き出すこと」と明快な考えが提示された。まさに、看護の「実践」、「教育」、「元気」が繋がった瞬間であった。

シンポジウムに参加して受け取った空気は、参加者の数ほどの価値があるのだと思う。本論文及び学術大会講演集を併せてお読みいただきたいと思う、そして、シンポジウムでの「熱い元気の波」にいつも揺さぶられていたいと願っている。

【座長のまとめ】

以上にシンポジウムを振り返ってみたが、座長としての私見を述べさせていただきたい。

シンポジストは、一人一人経験の内容も用いる言葉も表現方法も違うけれど、元気の出る実践と教育は「人の、人による、人のための働きかけ」にかかってくるとまとめられるだろう。

実践も教育も、「人」である学生・ナース・クライアント等の成長を目標として、クライアントのためを第一義としての働きかけである。教師は学生を心にかけて、ナースはクライアントを心にかけて、行政はその管理下にある施設、組織やそこに属する人々を心にかけて働きかける。教育には教える人と教えられる人がいるけれど、教える人はまた同時に教えることによって教えられる。看護実践も同様に、援助者（ナース）は援助を受ける人（クライアント）を援助するが、またナースはクライアントによって成長していく。「人は人によって」育まれていくのである。

このように、実践と教育の中核には「人」が生々しく生きているのである。かつて、私は臨床現場を離れてややしばらくして患者と関わる機会を持ったとき、病いによって、生きるエネルギーが消耗されているはずの患者さんなのに、かえって、通常健康人と言われている人と一緒にいるよりも私の中にエネルギーを沸き立たせてもらった経験がある。そのとき、ナースの元気の素は、患者の生きたいという生命力だと強く感じた。

まさに、元気の素は、人が生きる営みそのものなのだと思う。実践も教育も、人が、今、ここで“真に生きている”ことそのものが元気に繋がるのだと思う。このシンポジウムが、聴衆および読者の方々に、教育者としてまた実践者として、「元気」に生きていける一助となることを願っている。

最後に、座長という貴重な体験の機会をいただいたことを感謝しております。